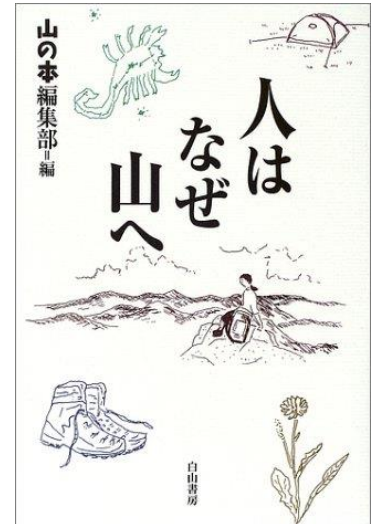


白山書房編集部編『人はなぜ山へ』

白山書房の季刊誌『山の本』創刊10周年を記念して、それまでに『山の本』に掲載された名（迷？）文を収録したものである。その道での有名、無名いろいろ取り混ぜて40人ほどの山行記などが載っている。世間にも名が売れているのは、女性エヴェレスト初登頂の田部井淳子、花の山旅の坂倉登喜子、シンガーソングライターみなみらんぼう、ドイツ文学者池内 紀など、また山の世界で多少とも知られている口は、丹沢のハンス・シュトルテ、黒部川の志水哲也、山岳紀行の石井光造、イラストレーター沢野ひとし、それに別項で紹介した柏瀬祐之などである。名が無くてもなかなか読ませる祐筆が多い。小生の駄文などとは雲泥の差である。



「憧れの山」、「私が山を登る理由」、「人との出会い」、「山でのハプニング」の4章で構成されている。その中で何篇かを紹介したい。

まず「人との出会い」では柏瀬祐之の「赤鼻先生がいく」というのが面白い。ピエロのオジサン風の素朴な英国人の赤鼻先生を日本の山に案内した時の話である。同行は留学経験を持つ縁なしメガネのヤサ男、外人男性との交際経験を誇る絵描きの女史、スペイン語なら任しときと筋違いの言い訳をつぶやくパタゴニア帰りの若者とそのかわいい婚約者。乳頭温泉の混浴で赤鼻先生はすっかり絵描きの女史に惚れ込んでしまった。どうもそれは横恋慕に終わっらしいが、彼我の習慣、考え方の違いなども、赤鼻先生のどこか哀しい情景を交えて描かれていて楽しい。

同じく「人との出会い」に池内 紀の「ケントクの親子」というのがある。ケントクとは甲州の乾徳山のことである。この山で遇った何かがおかくしてどこか哀しい土方か労務者か浮浪者然とした親子の佇まいが描かれている。何と言うこともない文章であるが、行間から哀愁が立ち昇っていてそこはかたなく物哀しい。

「山でのハプニング」では、「雪の滝沢リッジ」という一篇がある。雪の谷川連峰一ノ倉沢の高距1200m、39ピッチ3日間の長丁場の壁を、偶々麓からついて来たワン公をザックに背負って登攀した話である。犬を連れて一般コースを歩いている人は時々見掛けるが、犬をザックに担いで岩壁を登ったというのは珍しい。

この章には我が畏敬する赤鬼せんせいの「清水峠の雪原にて」という一文が載っている。単独行で雪溪のクレバスに落ち込んで脱出に苦労した話が、今は亡き岳友への愛惜と重ねられている佳篇である。

白山書房 2002 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)